

調査研究 I 「養育者の生活スタイル調査」

1. 調査の目的

障害のある子を養育している保護者は、精神的・物理的な支援が必要である。これまでに障害児を育てている保護者、特に母親のストレス研究は、前章で述べたように様々に行われている。しかしこれらの研究では、個人の生活スタイルや地域の特色による差異を把握した上で検討しているものは少ない。

これまでの研究では、保護者が支援を一番必要とする時期は子どもが乳幼児期であることが明らかになっている。そこでこの調査では、障害のある子を抱える保護者に対して生活の実状を調べ、個人の生活スタイルや地域の特色を把握した上で、保護者が必要としている支援には、どのようなものがあるのかを明らかにすることを目的としている。

2. 調査方法等

1) 調査項目の作成

アンケートの作成にあたり、母親のストレスに関しては諏訪ら (1998) の「親子の生活と意識に関する調査」、子育て支援に関しては厚生科学研究 (子ども家庭総合研究事業) (2002)、障害児との家族生活に関しては藤本ら (1999) の「障害をもつ子どもたちの生活実態調査」等の項目を一部引用、あるいは参考にし、独自の項目も加えて、原案を作成した。これらの項目を研究協議会において研究分担者、研究協力者 (北海道旭川市・福島県いわき市・群馬県藤岡市・横浜市・富山県黒部市・静岡県沼津市・山口県山口市・福岡県古賀市にある 8 カ所の障害児関係機関に所属する職員) で検討し、アンケートを作成した。(資料 I-1 参照)

2) 調査項目の内容

「養育者の生活スタイル調査」は、A 4 版 8 頁でその内容は次の 6 項目からなっている。①家族の実態(家族構成と年代・子どもの養育者・アンケート記入者)、②子どもの実態(子どもの障害・子どもの所属・家庭での過ごし方)、③子育ての実態(子育てで困ったこと・育児の相談相手・地域子育てサークル・子育ての考え方・子育てのイメージ)、④養育者や家族の実態(養育者の生活・養育者の疲労感・養育者の外出・生活全般で感じること・家族の育児協力・住宅・居住地・自家用車の有無) ⑤養育者の就労の実態(就労の有無・職業・仕事と育児・過去の就労の有無) ⑥自由記述からなる。(図 I-1 参照)

3) 調査方法及び実施時期

平成15年9月～10月に研究協力者の元にアンケート用紙を送付し、配布を依頼した。

アンケート用紙には返信用封筒を添え、同年12月20日を締め切りとして、記入者からの直接郵送によりアンケート用紙の回収を行った。実際には、平成16年1月まで返送があり、それらについても集計の対象とした。

4) 調査対象

北海道旭川市・福島県いわき市・群馬県藤岡市・横浜市・富山県黒部市・静岡県沼津市・山口県山口市・福岡県古賀市にある8カ所の障害児関係機関に所属する職員の協力により、この8地域に在住する10歳以下の障害のある子を抱えている保護者を対象とした。

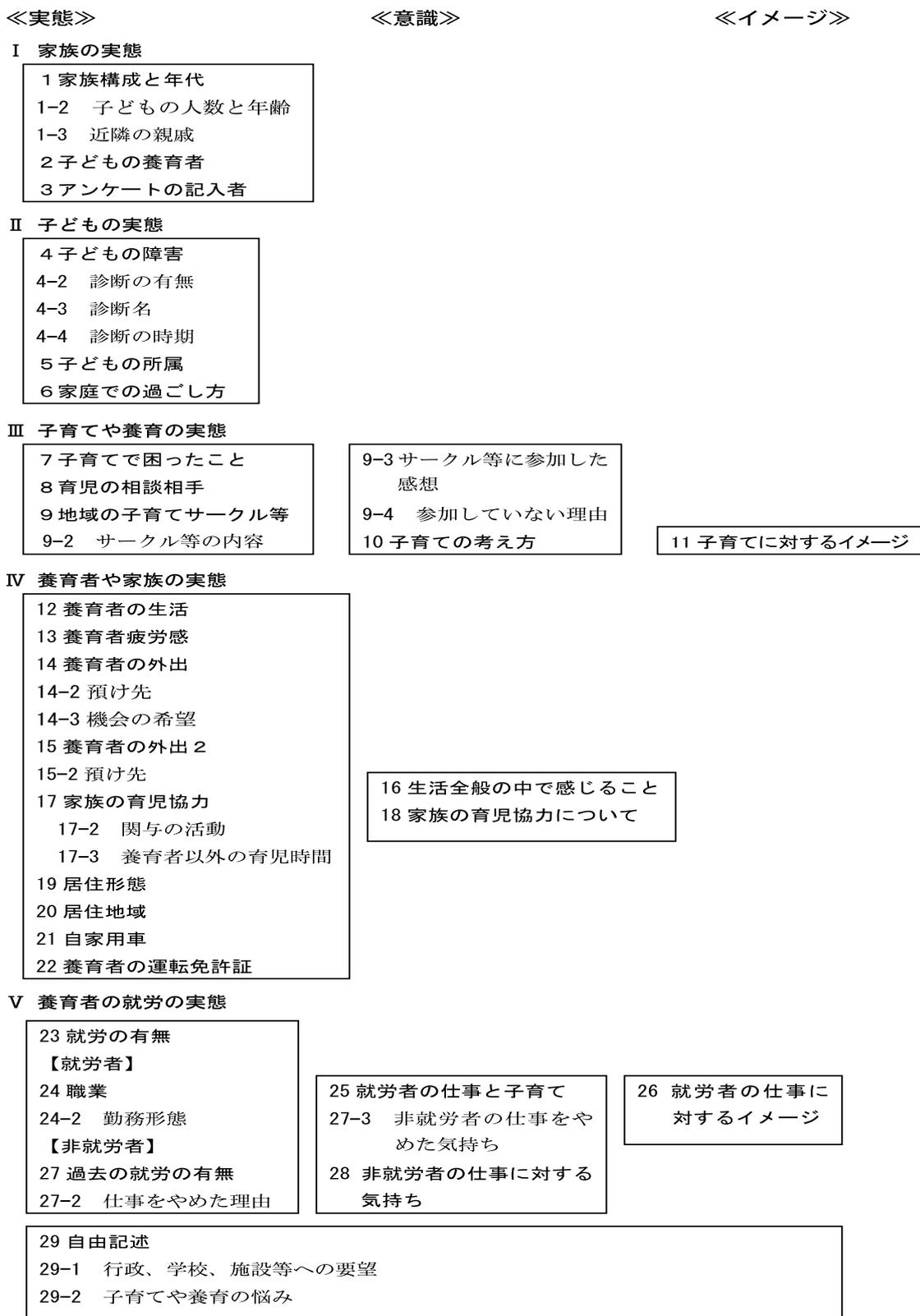


図 I - 1 養育者の生活スタイル調査 調査項目の構成

3. 結果の概要

アンケートは831通配布し、382通の回収があり、回収率は、46.0%であった。

1) 家族の実態

○同居人数と近隣に住んでいる親族数

全体として、4人家族が最も多く、次いで、3人、5人家族であったが、地域別に見ると、横浜では3人家族が多く、藤岡では6人家族が多い結果であった（図I-2参照）。4人以下で生活している家庭が全体的には60%であるが、同居人数が多い（4人以下の割合が少ない）地域は、藤岡市や黒部市であり、逆に同居人数が少ない（4人以下の割合が多い）地域は、横浜市や古賀市であった。

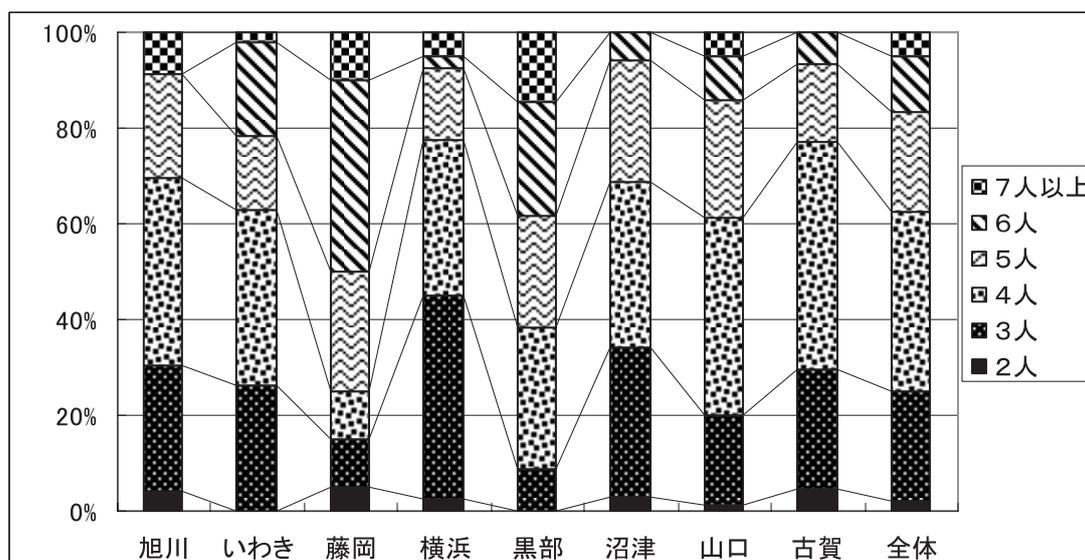


図 I - 2 同居している人数

また、近隣に住んでいる親族はいない、という家族が全体では40%を占めたが、いわきでは、いない人の割合が少ない状況であった。一方、近隣に親族が5人以上いると回答した割合が5%程度あった地域は、旭川、いわき、藤岡、黒部であった（図I-3参照）。

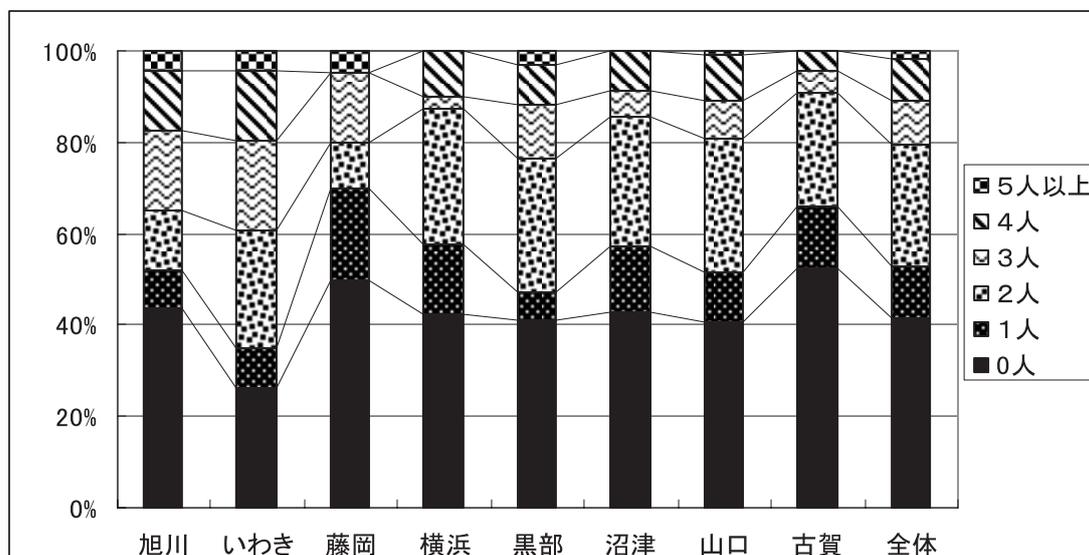


図 I - 3 近隣に住んでいる親族

○子どもと関わる時間の多い人とアンケートの記入者

子どもと関わる時間の多い人は、母親が最も多く、365件であった。次いで母方祖母の11件、父親の8件、父方祖母の6件であった。複数回答を可としたが、女性のかかわりが多い（図 I - 4参照）。また、アンケートの記入者も母親が最も多く、366件であった。次いで父親が14件であり、父方祖父1件、その他1件であった。

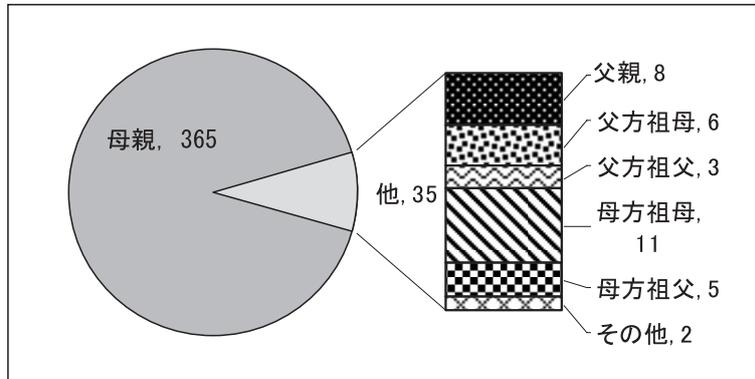


図 I - 4 子どもと関わる時間の多い人

2) 子どもの実態

○子どもの身体面・発達面の問題

子どもの身体面・発達面の問題について「対人関係の問題」「多動傾向」「ことばの問題」「注意・集中の困難」「自閉的傾向」「発達全体の遅れ」「運動の問題」「てんかん」「内臓の疾患」「視覚の問題」「聴覚の問題」「その他」の中から当てはまるものすべてに選択を求めた。「ことばの問題」の回答が最も多く294件であった。次いで「発達全体の遅れ」が219件、「自閉的傾向」155件、「注意・集中の困難」152件、「運動の問題」150件であった（図 I - 5参照）。

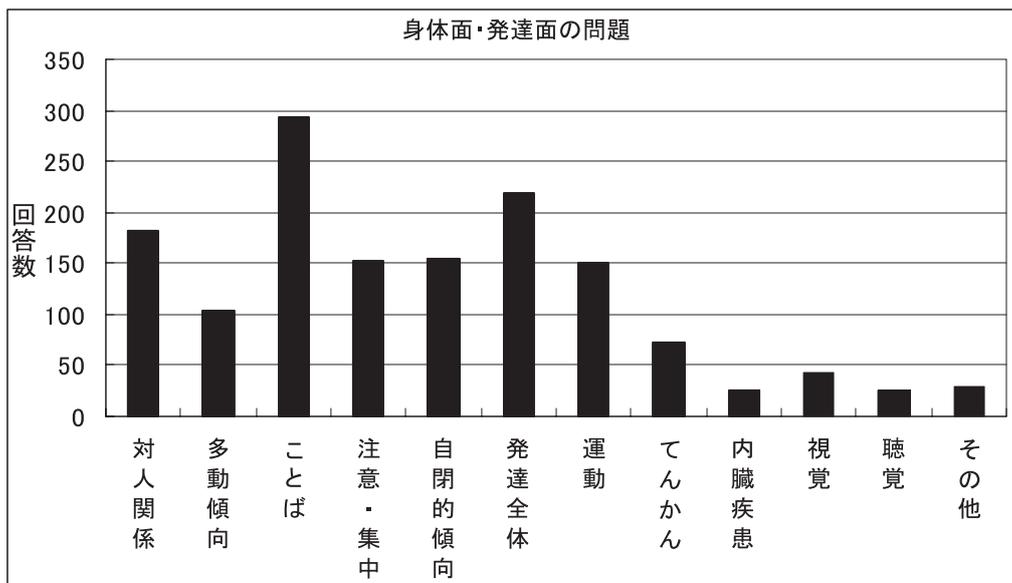


図 I - 5 子どもの身体面・発達面の問題

○子どもの在籍

在籍している機関について、「保育園」「幼児通園施設」「幼稚園」「小学校通常の学級」「小学校特殊学級」「養護学校」「聾学校」「盲学校」「なし」「その他」の中から選択を求めた。

「幼児通園施設」に在籍している子どもが最も多く120件、次いで「養護学校」79件、「保育園」58件、「小学校特殊学級」57件であった（図 I - 6参照。図では、「聾学校」「盲学校」を「養護学校」に合わせ、「保育園」と「幼稚園」を合わせて示してある）。

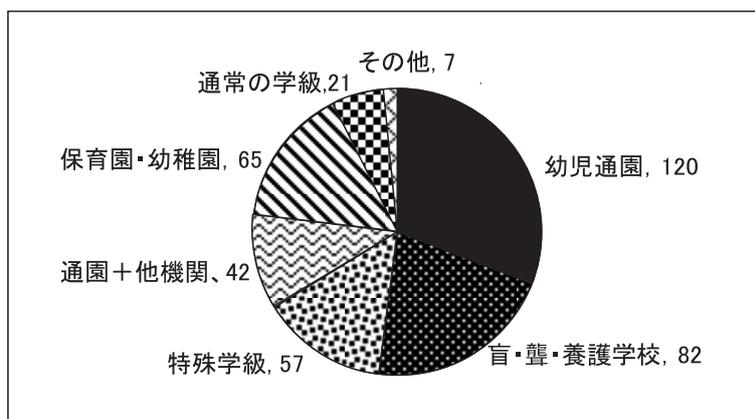


図 I - 6 子どもの在籍機関

○子どもの家庭での生活

平日（放課後）・休日・長期休日に子どもは誰とどの様に過ごしているかを「養育者と一緒に過ごす」「家庭の者（兄弟姉妹）と過ごす」「保育園・学童保育・寄宿舍・福祉施設の職員や友達と過ごす」「ボランティアと過ごす」「長期休日のホリデー事業の職員や友達と過ごす」「その他」という状況で、「よくある」「たまにある」「ほとんどない」から選択回答を求めた。

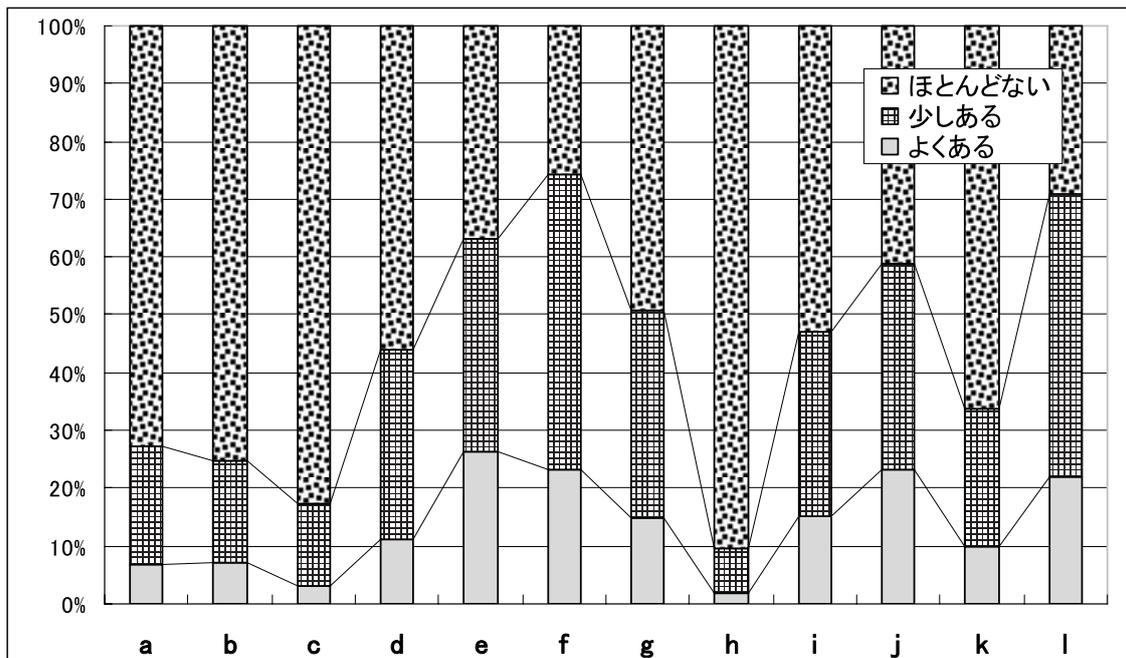
調査した7割以上の子どもが平日の放課後・休日・長期休日には、養育者や家族と一緒に過ごしており、福祉施設の職員やボランティアと過ごすのは、少数であった。

3) 子育ての実態

○子育ての困り感

「お子さんを育ててこられて、今までにどんなことに困ったり悩んだりしましたか」について、12項目を設定し、「よくある」「少しある」「ほとんどない」の3段階から選択回答を求めた。

「我が子は育てにくい子だと感じて」「子どものために仕事や趣味を制約されて」「子育てから離れて自由になれないと」「近所に子どもを遊ばせるところがなくて」等に、困ったり悩んだりしている（図 I - 7参照）。この結果は、回答者が就労しているかどうかによって、違いが見られた（「小考察」参照）。



- a. 家族からもっと子どもの世話をするようにいわれて
- b. 子どもを産んだ時期が適切だったかどうかと
- c. 我が子と相性が悪いのではないかと
- d. 近所の人に子どもを比べられて
- e. 我が子は育てにくい子だと感じて
- f. 子どものために仕事や趣味を制約されて
- g. 近所に子育てについて話し合える人がいなくて
- h. 祖父母に子どもをとられるように感じて
- i. 子どもの具合が悪いとき手助けしてもらえなくて
- j. 近所に子どもを遊ばせるところがなくて
- k. 祖父母と子どものしつけの方針が合わなくて
- l. 子育てから離れて自由になれないと

図 I-7 子育て中の悩み

○子育ての相談相手

「お子さんのことで相談する相手はどなたですか」について、選択肢によって3番目まで回答を求めた。そのうち「もっとも頼りになる方」に対する回答を表 I-1 に示した。

夫婦間での相談が200件で最も多く、次いで、親・きょうだい・親戚の59件であった。多くは、身近な人に相談している。また、誰もいないと回答した人が2件であった。

表 I-1 子育ての相談相手

選 択 肢	人数
夫婦間	200
親・きょうだい・親戚	59
幼稚園・保育園・学校の先生等	33
専門家(医師保健師等)	30
幼稚園・保育園を通じた友人	29
友人(幼稚園保育園以外)	3
その他	26
誰もいない	2

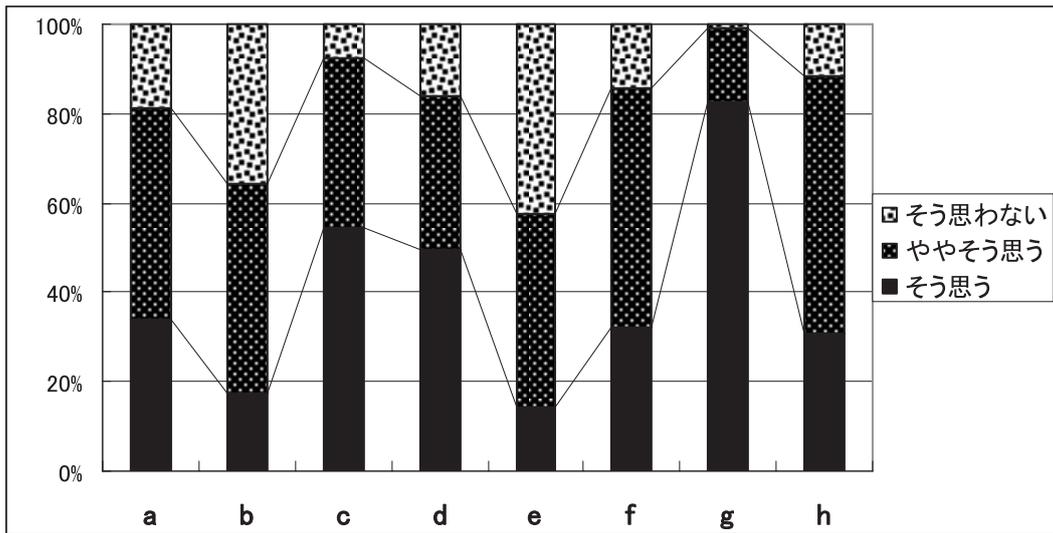
○地域の子育てグループやサークルの利用状況

「地域の子育てグループやサークルに参加していますか」について「参加している」「参加していたがやめた」「参加していない」の選択肢から回答を求めた。地域で行われている子育てグループやサークルへは、全体の半数が地域のサークルやグループへの参加経験がなかった。

参加していない多くの理由は「近くにグループがない」「参加の必要性を感じない」「仕事等があるので参加している時間がない」「その他」であった。「その他」の自由記述には「どんなものがあるかよく知らない」「他の子と比べてしまい嫌な思いをしてしまう」「障害児では受け入れてもらえない」「これ以上は子どもの体力的にも時間的にもできない」などであった。

○子育てに対する気持ち

子育てに関する意見について、8項目を設定し、「そう思う」「ややそう思う」「そう思わない」の3段階から選択回答を求めた。ほとんどの人は「子育てによって親は成長する」と考えており、「育児は父母が対等にすべき」「自分の生き方・生活が大切」「子育てと家事で一生を終わらせたくない」「子どもが小さいときは自分を犠牲にしても仕方がない」などの考え方が支持されていた(図I-8参照)。



- a. 子どもが小さいうちは育児に専念すべきである
- b. 女性が仕事をするなら家事・育児の責任を果たした上ですべきである
- c. 育児は父母が対等にすべきである
- d. 子育てと家事だけで一生を終わらせたくない
- e. 子離れはできるだけ早くした方がいい
- f. 子どもが小さい時は自分を犠牲にしても仕方がない
- g. 子育てによって親は成長する
- h. 自分の生き方・生活が大切である

図 I - 8 子育てに対する気持ち

○子育てのイメージ

子育てに対するイメージについて、「やりがいのある-やりがいのない」「楽しい-つまらない」「易しい-難しい」「創造的な-創造的でない」「解放された-抑圧された」のそれぞれについて5段階評定の最もよく当てはまるところを求めた。子育ては、比較的「難しい」が、「やりがいがある」「楽しい」ものとして受けとめられている(図I-9参照)。

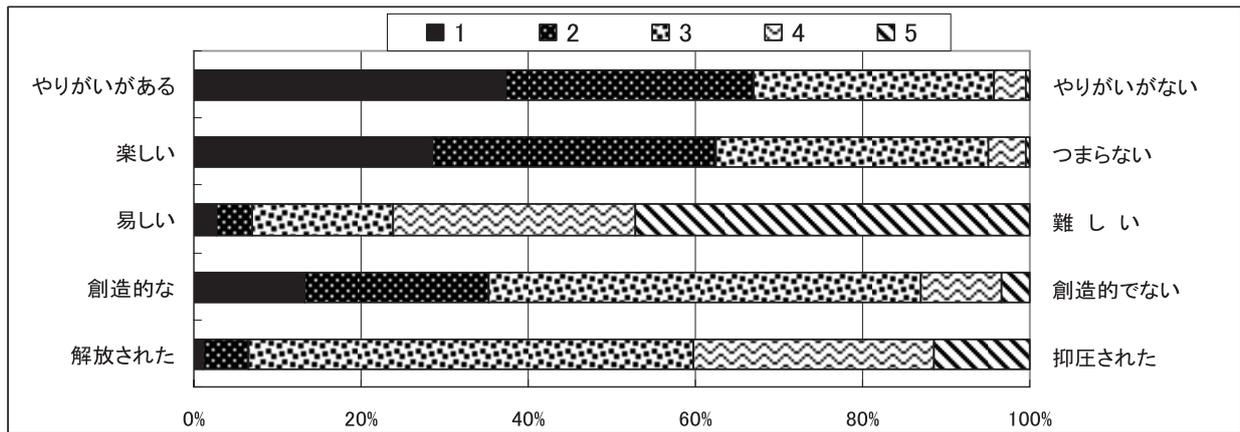


図 I - 9 子育てに対するイメージ

4) 養育者や家族の実態

○日常生活の実態

「どのように生活しているか」について、4段階評定で回答を求めた。入浴・夕食・睡眠等については半数以上がゆったりとれる状況にあるが、夫婦だけの時間は十分にとれていない状況である(図 I - 10参照)。

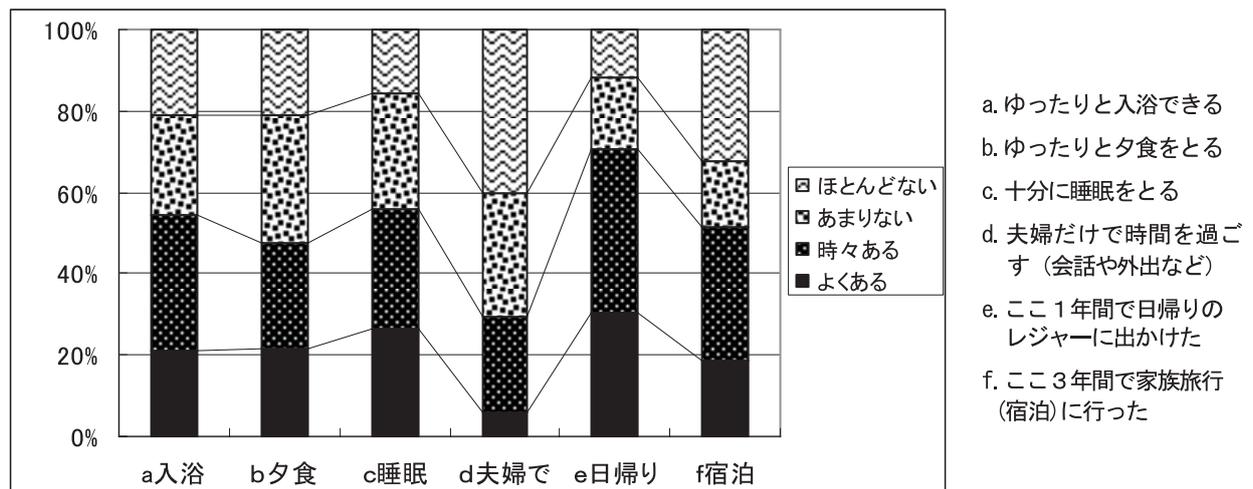


図 I - 10 日常生活の実態

○疲労感

身体の疲れと精神的な疲れについて、「毎日疲れる」「時々疲れる」「あまり疲れない」「全く疲れない」の4段階評定で回答を求めた。90%以上の人が身体的にも精神的にも疲れを感じている。

○養育者の外出

「あなたが、自分の楽しみや勉強・サークルなどのために出かけることはありますか」と「冠婚葬祭や兄弟姉妹の行事、ご家族の病気等の時、一時的にお子さんを預かってもらったことがありますか」という質問に「ある」「ない」で回答を求めた。6割から7割の人が外出のために子どもを一時的に預かってもらった経験を持っている。しかし、外出の目的が、自分の楽しみや勉強のための場合と冠婚葬祭等のための場合を比較すると、全体的に冠婚葬祭等の場合の方が預かってもらう割合は高い。また地域によっても差が見られる(図 I - 11参照)。特に旭川・いわき・黒部では、自分のための楽しみや勉強のための外出と冠婚葬祭等による外出の割合に差がある。

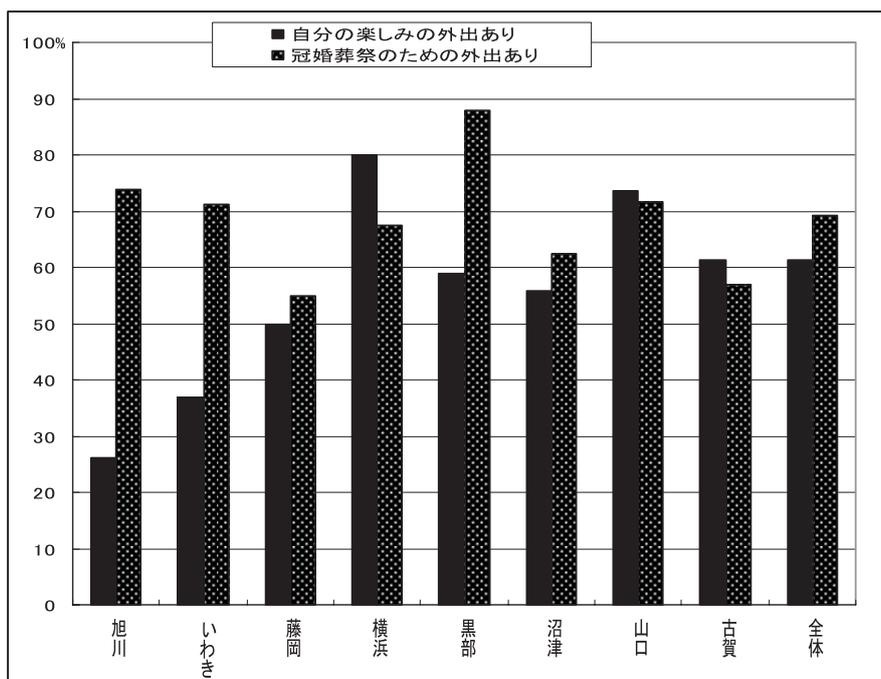
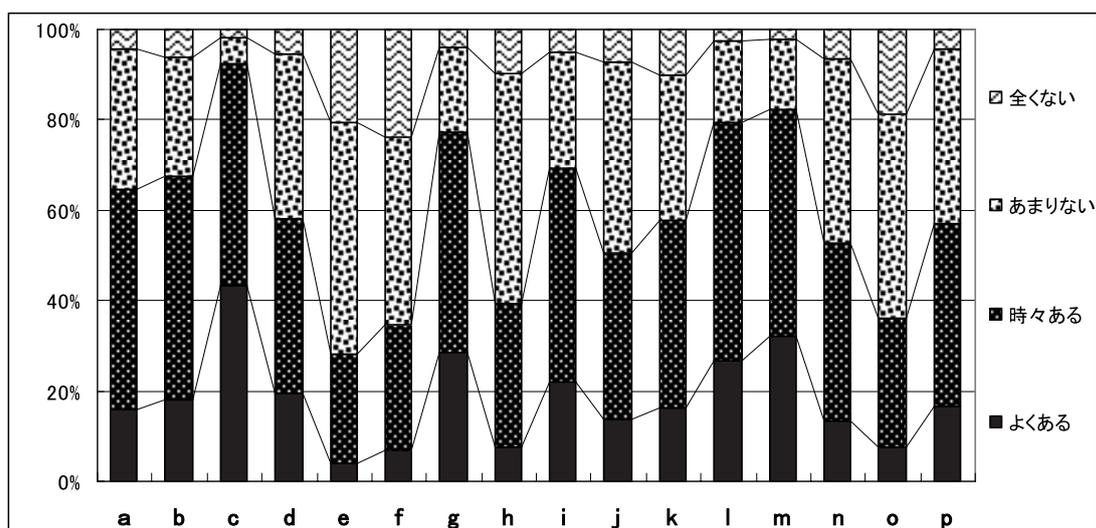


図 I - 11 自分の楽しみや勉強のため等での外出と冠婚葬祭等のための外出

○生活全般に対する気持ち

「あなたの生活全般において、最近、次のように思ったり感じたりすることがどれくらいありますか」についての質問を16項目設定し、「よくある」「時々ある」「あまりない」「全くない」の4段階から選択回答を求めた（図 I - 12参照）。

回答者は、「何となく疲れがたまる」「小さなことでイライラしてしまう」「時にはすべてのことから解放されたいと思う」と思う反面、「今の生活は楽しいと思う」という気持ちももっていることが明らかになった。この結果は、回答者が就労しているかどうかによつての違いが見られた（「小考察」参照）。



- a. 家族の中で自分だけが苦勞しているように感じる
- b. 誰かに、ねぎらいや感謝のこトばをかけてほしい
- c. なんとなく疲れがたまる
- d. 自分のがんばりの割には、生活が楽ではないと思う
- e. 今の生活には、がんばりがいがないと思う
- f. 自分のやっていることが意味のあることなのか疑問に思う
- g. 時には、すべてのことから解放されたいと思う
- h. 今の生活には、創造的な要素が少ないと思う
- i. 自分の生活が、自分の思うようにならないと思う
- j. 自分が本当にしたいことが犠牲になっていると思う
- k. 今の生活は同じことの繰り返しばかりだと感じる
- l. 今の生活は楽しいと思う
- m. 小さなことで、イライラしてしまう
- n. 今の生活はがまんばかりだと思う
- o. 自分が世の中の動きから切り離されているように感じる
- p. 日々、自分が成長していると思う

図 I - 12 生活全般に関する気持ち

○家族の子育ての協力

「同居されている家族は、普段どのくらいお子さんの世話をするか」について3つのレベルで当てはまるものに回答を求めた。「手を出さない」と回答したのは約1割であり、多くの回答者は「忙しいときに手伝ってくれる」「よく世話をしてくれる」と感じている。調査を行ったほとんどの地域で3割から4割程度の人が「よく世話をしてくれる」と回答していたが、「横浜」の回答は2割を切っていた（図I-13参照）。

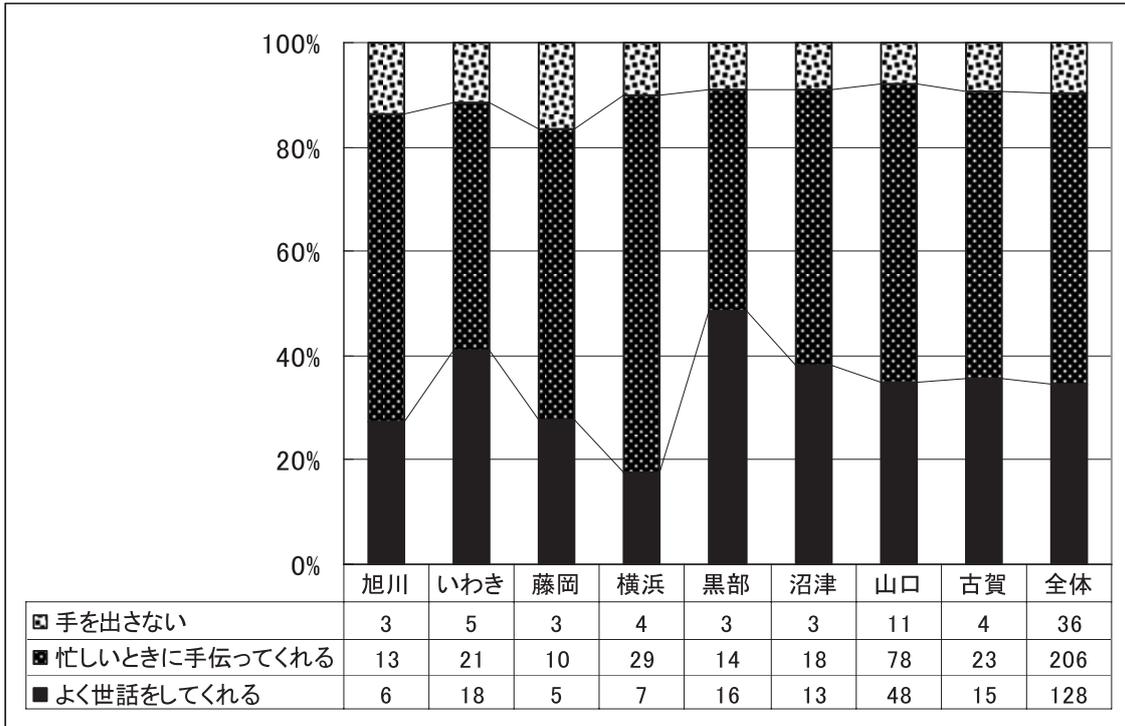


図 I - 13 同居家族の子育て協力の実態

また、子育てへの協力についてどのように感じているのかを「よく手伝ってくれている」「まあまあ手伝ってくれている」「もう少し手伝ってほしい」「もっと手伝ってほしい」の4段階評定で尋ねると、4割弱の人は、手伝って欲しいと感じている（図I-14参照）。上記の結果と比較すると「忙しいときに手伝ってくれる」実態ははあるが、「もう少し手伝って欲しい」という気持ちがあることも事実である。

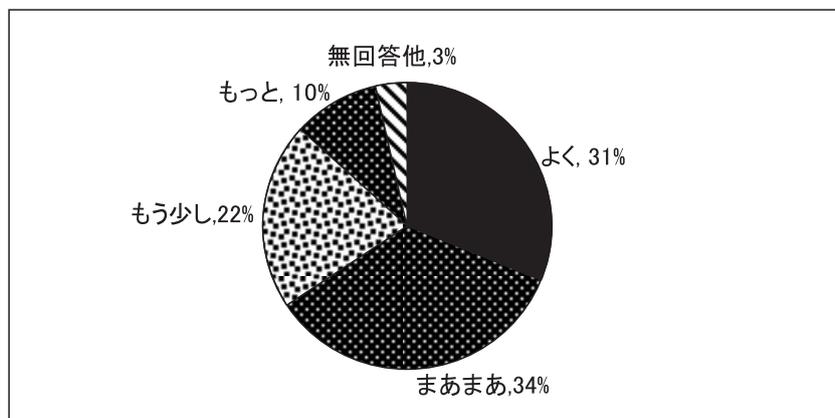


図 I - 14 家族の子育ての協力に対する受け止め

○住まい

現在の住まいについて7項目の中から選択して回答を求めた。半数以上が戸建ての持ち家であった。住居は回答者の生活水準とも関係するかもしれないが、地域の特徴も見ることができる。例えば、分譲マンションに居住していると回答があったのは、横浜が最も多く、古賀、沼津に多い。また、黒部、藤岡は8割以上が戸建て持ち家であった（図I-15参照）。

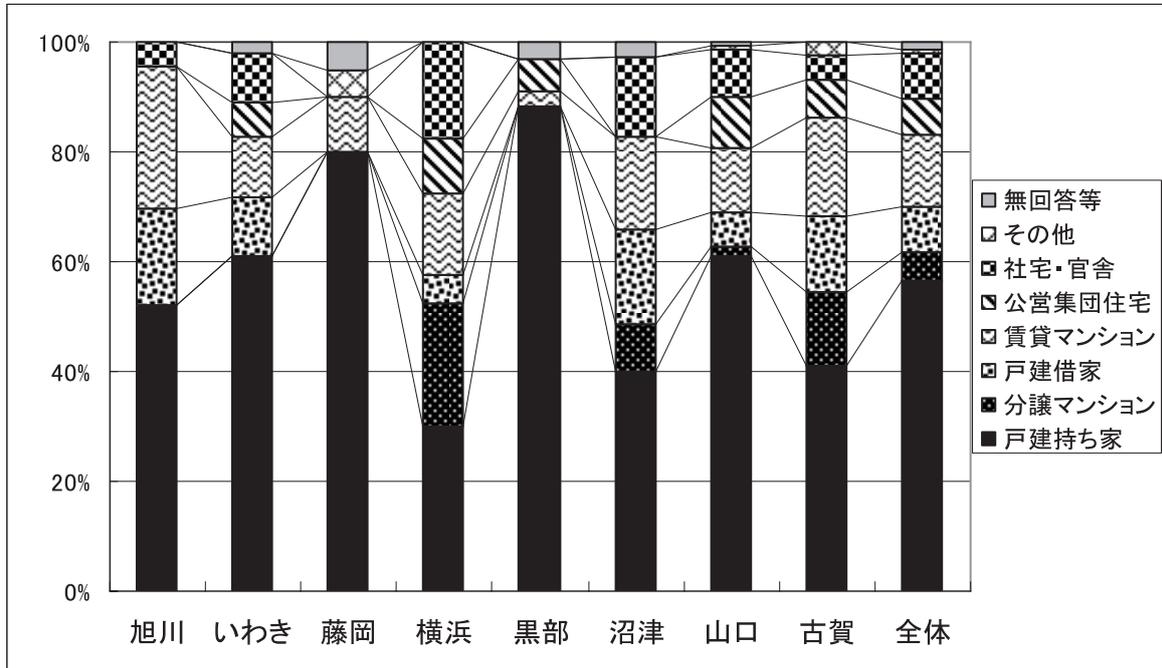


図 I - 15 住まい

○自家用車の保有

自家用車の保有の有無について回答を求めた。自家用車を「なし」と回答したのは、8件であり、多くの回答者の家では、自家用車を保有している。「1台」と「2台以上」の回答割合を見ると、横浜、古賀では「1台」が多く、それ以外の地域は「2台以上」が7割弱を占めていた。全体として「2台以上保有している」が6割以上であった（図I-16参照）。

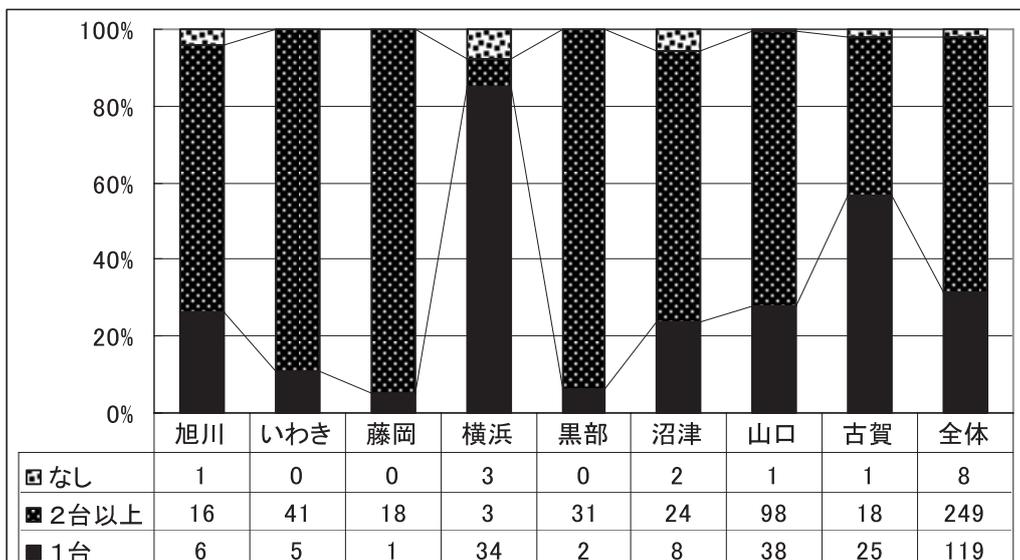


図 I - 16 自家用車の保有台数

5) 養育者の就労の実態と生活

○就労の有無

「あなたは現在働いていますか」という質問に対して、「働いている」は127件、「働いていない」は245件、無回答10件であった。この回答の中から、母親が記入した回答を抽出し集計すると、「働いている」118件、「働いていない」240件、無回答9件で回答した母親の32%が就労していた（図 I-17参照）。

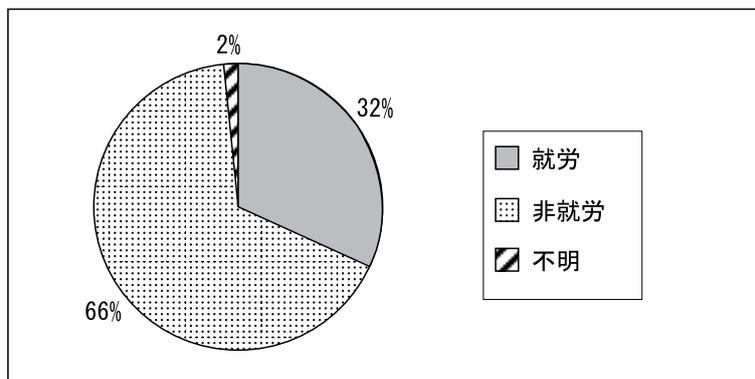


図 I-17 母親の就労割合

○就労している母親の職種と勤務形態

就労している母親の職種は「パート・アルバイト」が44%で最も多く、次いで、「公務員、教育・医療・社会福祉関係職員」18%、「会社員」17%であった（図 I-18参照）。

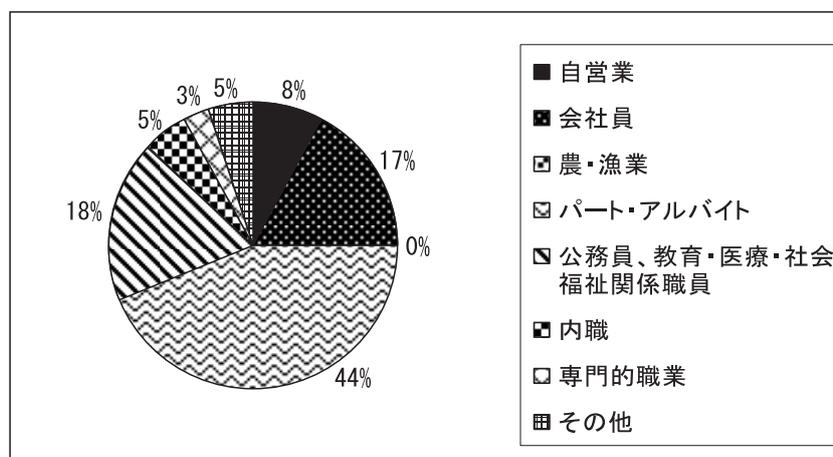


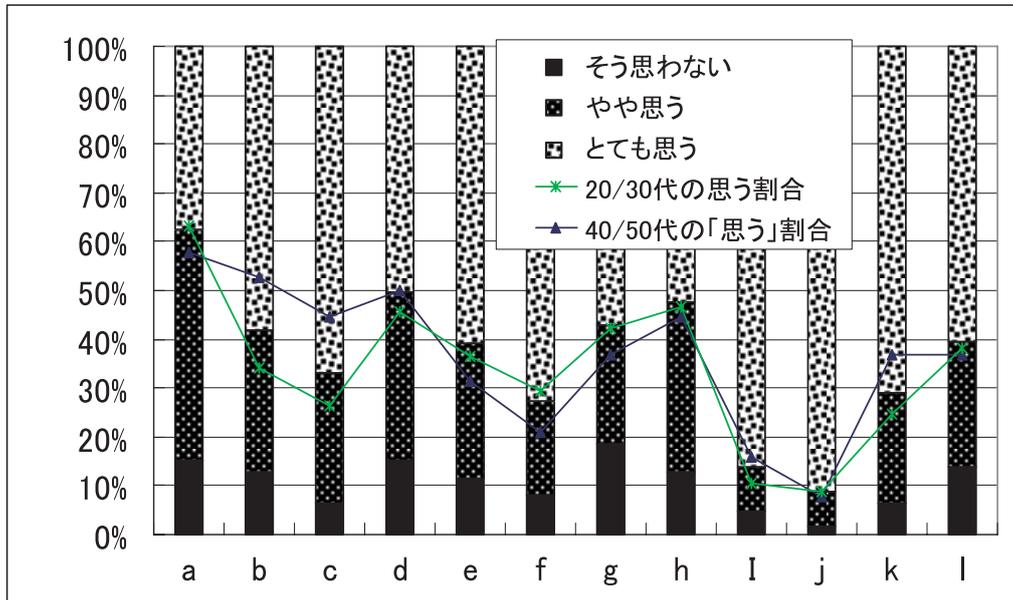
図 I-18 就労している母親の職種

また、勤務形態では、「夜間や短時間勤務等」の割合が56%と最も多く、「日勤の定時勤務」33%、「三交代制などの変則勤務」6%、であった。上記の結果とあわせると、就労している母親の多くは、短時間のパートやアルバイトをしていることが多いと思われる。

○就労している母親の仕事と子育てに対する気持ち

「仕事と子育てについての気持ち」についての質問を12項目設定し、「そう思う」「ややそう思う」「そう思わない」の3段階から回答を求めた。

仕事と子育てについて強く思っていることは「仕事がつくて身体が疲れる」「自分の働きに比べて賃金が安い」「家族と話し合う時間が少ない」等であった（図 I - 19参照）。就労している母親は、仕事と子育てについて、身体的・物理的課題を多く感じていた。また、この気持ちは就労している母親の年齢によっても差がみられた（「小考察」参照）。



- a・仕事がつくてからだ疲れる
- b・望むときに休暇がとりにくい
- c・今の仕事は私を生かしていない
- d・自分の働きに比べて賃金が安い
- e・職場の人間関係に不満がある
- f・子育てについて話し合える同僚がいなくてさびしい
- g・子どもと接する時間が短く気になる
- h・家族と話し合う時間が少ない
- i・働いていることで家族に引け目を感じる
- j・私が働くことに、家族は反対である
- k・仕事をやめようかと迷っている
- l・仕事と子育ての両立に悩んでいる

図 I - 19 就労している母親の仕事と子育ての気持ち

○就労している母親の仕事に対するイメージ

就労している母親が仕事に対して抱いている5つのイメージについて、5段階評定でもっともよく当てはまるところに回答を求めた。仕事に対するイメージは、「やりがいがある」「楽しい」ものとして受けとめられていた（図 I - 20参照）。

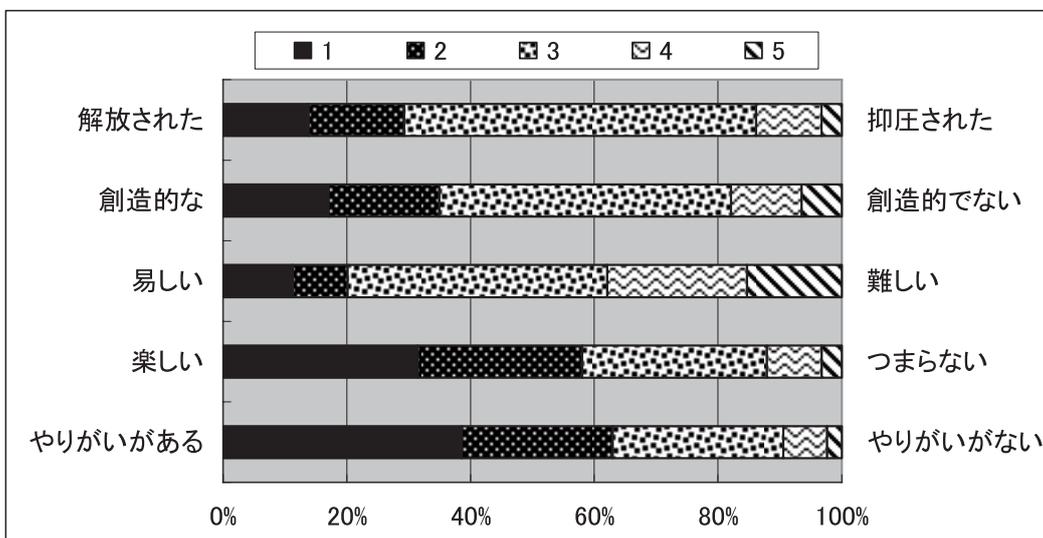


図 I - 20 就労している母親の仕事に対するイメージ

○就労していない母親の就労経験

上述したように、「あなたは現在働いていますか」という質問の回答のうち、母親が記入した回答を抽出し集計すると、「働いている」118件、「働いていない」240件、無回答9件であった。「働いていない」と回答した人には、以前に働いたことがあるかどうかを尋ね、さらに働いたことがある人には、仕事をやめた理由と、やめたことについての気持ちを尋ねた。

その結果、現在就労していない98%の母親が働いていたことがあり、仕事をやめた理由としては出産・育児のため（47%）、結婚のため（44%）であった（図 I - 21参照）。

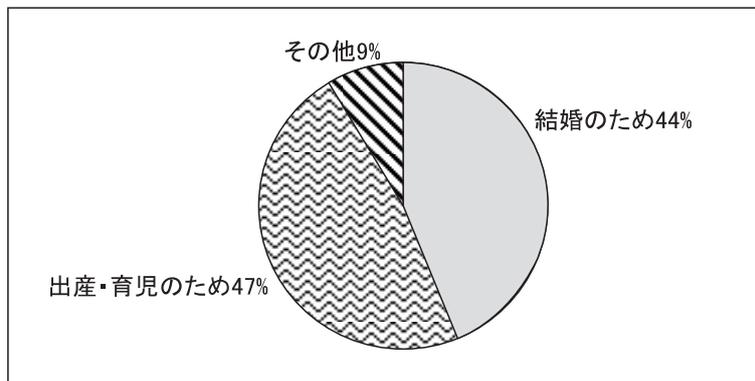
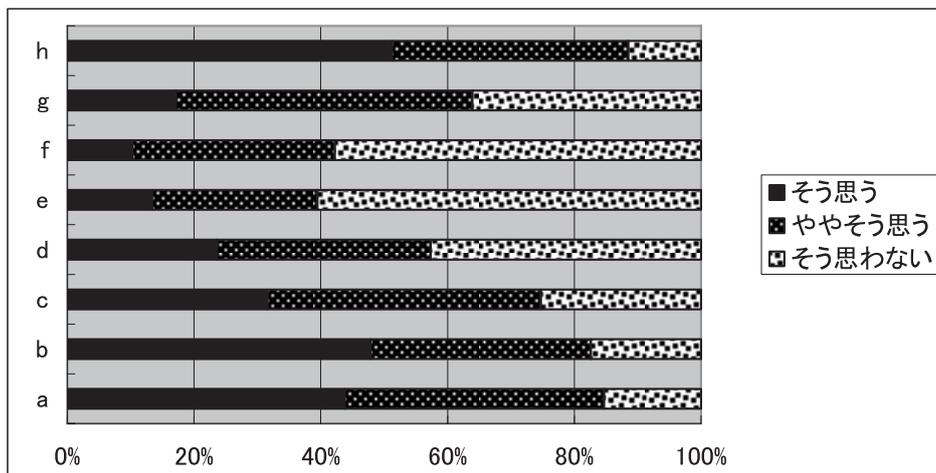


図 I - 21 仕事をやめた理由

そして仕事をやめたことについては、42%の人は残念ではないと思い、「少し残念」は41%であった。

○就労していない母親の仕事と子育てに対する気持ち

「あなた自身の気持ち」についての質問を8項目設定し、「そう思う」「ややそう思う」「そう思わない」の3段階から回答を求めた。就労していない母親は、「今は家事や育児に専念したい」「家族は私が家事や育児に専念することを望んでいる」と思っている人が80%以上いるが、その一方で「将来は働きたい」と思っている人も80%以上いた（図 I - 22参照）。



- a.今は家事や育児に専念したい
- b.家族は私が家事や育児に専念することを望んでいる
- c.家事・育児すべてをまかされるのは負担が大きすぎる
- d.働きたいが子どもの預け先がない
- e.子どもを保育所に預けることは心配できない
- f.働かないことで社会からとり残されているように思う
- g.子育てだけの生活には不満を感じる
- h.将来は働きたいと思う

図 I - 22 非就労の母親の仕事と子育てに対する気持ち

4. 小考察

ここでは、調査結果で、回答者が就労しているかどうかの違いによってその回答の傾向が異なっていたもの、地域によって回答が異なっていたものについて取り上げ、考察を加える。

1) 就労の有無による意識の違い

回答者が就労しているかどうかの違いによって回答の傾向が異なっていたのは、「子育ての困り感」と「生活全般に対する気持ち」であった。

○子育ての困り感（図 I-7参照）

回答を「就労している」群（127件）と、「就労していない」群（245件）の2群に分類し、項目ごとに「よくある」と「少しある」を合計し、その割合を比較した。

12の質問項目のうち、9項目で「就労していない」群の方が「よくある」「少しある」という回答が多かった。特に2群の差が大きかった項目は、以下の4項目である。

e : 我が子は育てにくい子だと感じて
d : 近所の人に子どもを比べられて
l : 子育てから離れて自由になれないと
i : 子どもの具合が悪いとき手助けしてもらえなくて

一方、「就労している」群の方が「よくある」「少しある」が多かったのは、以下の2項目のみであった。

a : 家族からもっと子どもの世話をするようにいわれて
j : 近所に子どもを遊ばせるところがなくて

この結果から、就労している保護者よりも、就労していない保護者の方が子育て中に悩みを感じることが多いと考えられる。

また、この項目の回答を、単親家庭を除いた347件について同居家族の有無に（「同居あり」：75件「同居なし」：272件）より検討すると以下のような結果であった。

12の質問項目中、9項目で「同居なし」群の方が「よくある」「少しある」という回答が多かった。同居の有無によって差が大きい項目は、以下のものである。

i : 子どもの具合が悪いとき手助けしてもらえなくて
f : 子どものために仕事や趣味を制約されて
e : 我が子は育てにくい子だと感じて
d : 近所の人に子どもを比べられて

一方、「同居あり」群が高かったのは、以下の3項目のみであった。

k：祖父母と子どものしつけの方針が合わなくて
h：祖父母に子どもをとられるように感じて
b：子どもを産んだ時期が適切だったかどうかと

この結果からは、同居家族のいない保護者の方が子育て中に悩みを感じる人が多いと考えられる。

これらの結果を総括すると、就労せず、しかも祖父母等の同居家族がいない保護者が子育ての悩みを多く感じ、就労して祖父母等と同居している保護者に子育ての悩みは少ないということが推測される。祖父母との間で子育てに関する考え方の違い等で悩みが生じることもあるが、全体的には、同居家族が多いことで子育てに関する相談相手や子育てに対応する手となって、保護者を支えていることが考えられる。したがって、環境的に考えると都市部の核家族の就労していない保護者に対する支援が大切になってくる。

○生活全般に対する気持ち（図 I - 12参照）

「あなたの生活全般において、最近、次のように思ったり感じたりすることがどれくらいありますか」について16項目の回答を、「就労している」群（127件）と、「就労していない」群（245件）の2群に分類し、項目ごとに「よくある」と「時々ある」を合計し、その割合を比較した。

16の質問項目中12項目で「就労していない」群の方が「よくある」「時々ある」という回答が多かった。「就労していない」群がより多く回答した項目は、以下のものである。

k：今の生活は同じことのくり返しばかりだと感じる
m：小さなことでイライラしてしまう
o：自分が世の中の動きから切り離されているように感じる
f：自分のやっていることが意味のあることなのか疑問に思う

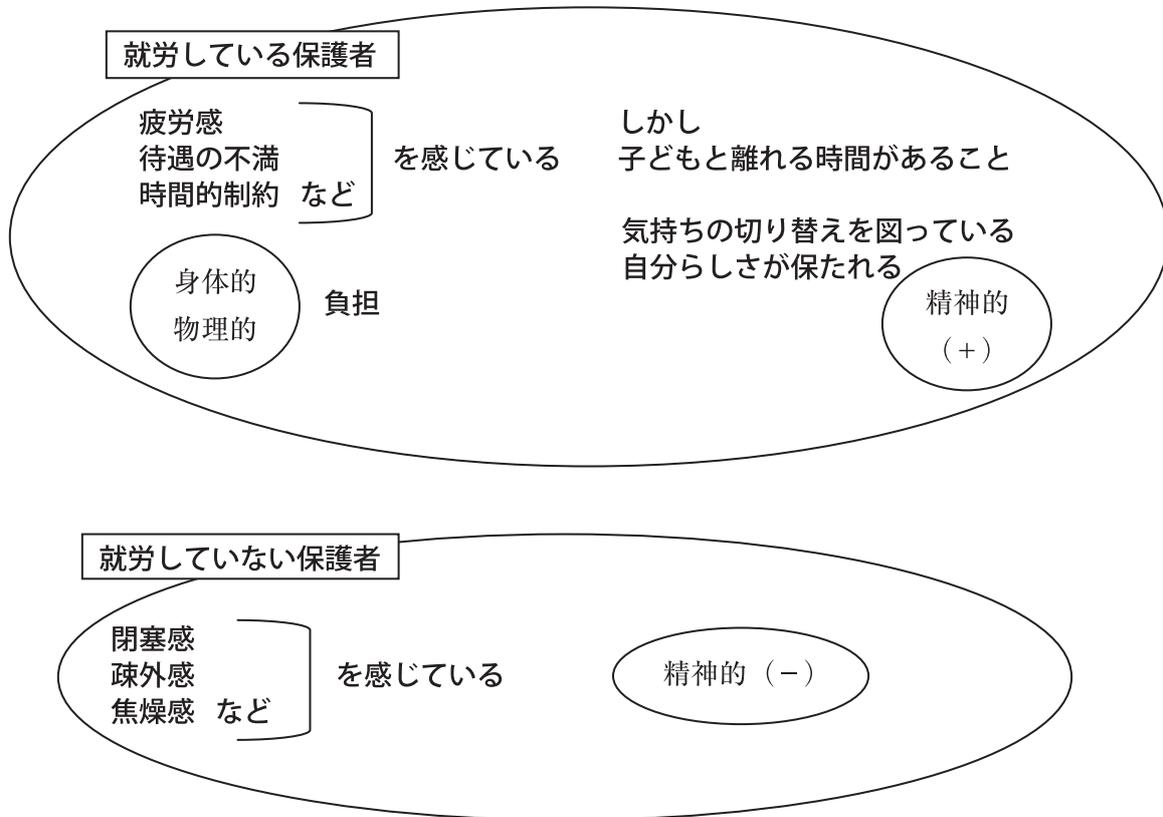
一方、「就労している」群の方が多かったものは、以下の1項目であった。

d：がんばりの割に生活が楽ではない

この結果からは、就労していない保護者の方が、生活全般に対する気持ちが、全体的にマイナスに感じていることが多いことが推察できる。就労している保護者は、家庭の生活以外にも過ごしている場があり、複数の立場を持って生活していることになる。そのため、生活全般に関する気持ちは、様々な要因によって影響され判断されるので、就労していない保護者に比べて、マイナスの感じが弱いと考えることができる。一方、就労していない保護者の生活の場は、家庭生活中心であることが多く、障害のある子どもと向き合わざるをえない時間が多くあることから、生活全般に対する気持ちが、マイナスに感じてしまうのではないだろうか。もちろん、このような生活全般への感じ方は、保護者のパーソナリティー、環境、子どもの障害、家族の協力の状況などにより、変わってくることも考えておく必要がある。

○まとめ

就労しているかどうかの違いによって「子育ての困り感」「生活全般に対する気持ち」に違いが見られ、整理すると、以下の図のようにまとめられる。



2) 就労している人の「仕事と子育てについての気持ち」の年代別比較 (図 I - 19参照)

就労している母親の「仕事と子育てについての気持ち」についての回答者を年代別に20・30代と40・50代に分けて、その傾向を分析した。年代による差が大きかったのは、以下の3項目であり、いずれの項目も40・50年代の保護者が思っている割合が多かった。

- b:望むときに休暇が取りにくい
- C:自分を生かせていない
- k:仕事をやめようかと迷っている

保護者の年齢が上がることは、育てている子どもの年齢も上がっていることが考えられる。子どもが成長するにつれて、子育てや家庭に関する課題よりも、仕事に関する課題を多く感じている傾向が見られた。これは、子どもの加齢に伴って、保護者は子どもに対する見方や考え方が安定すること、職場における役割が拡大していくこと等の要因が考えられる。したがって、就労している保護者の支援をすすめていく際には、保護者の子どもに対する考え方や、保護者の職場での役割や処遇等を加味した上で、支援方策を考えていく必要がある。

3) 地域による違い

地域により回答に差が見られたのは、「同居人数と近隣に住んでいる親族数」「養育者の外出」「住まい」「自家用車の保有」であった。これらの項目は、生活環境の違いである。

○養育者の外出（図 I - 11 参照）

自分の楽しみや勉強のために外出する場合と冠婚葬祭等のために外出する場合を比較してみると、養育者の外出の目的による違いで差のある地域があった。自分の楽しみや勉強のために外出がしにくい地域は、同居人数が多いあるいは近隣に住んでいる親族数の多い地域であった。家族や周囲に対応できる人手があるにもかかわらず、外出の目的によって外出しにくくなる状況は、周囲の人の理解や意識についても考えていかななくてはならないことを示唆していると思われる。

子どもの実態や行動が周囲に理解され、受け入れられているならば、生活していく際のトラブルや保護者のストレスが少なくなると推測される。逆に、周囲の理解がないと保護者は周囲から孤立したり、孤独感を感じたりして、生活に対する不満やストレスが大きくなると思われる。このように考えてくると、親族等の周囲の人たちに対してだけではなく、地域に対して、障害に関する情報を伝えていくことが必要である。そして、支援のシステムを考えていく上では、障害に理解のある地域における保護者支援のスタイルと障害の理解が十分でない地域の保護者支援のスタイルを分けて考えていく必要がある。

4) まとめ

本調査の結果全体をまとめると、障害のある子どもを養育している保護者の多くは、小さなことにイライラしたり、日々の生活から解放されたいという気持ちを日常的に持っていたりしている一方、生活に頑張り甲斐や楽しさも感じている。そして、就労している保護者よりも、就労していない保護者の方が子育てに関する悩みを感じるが多かった。

子育ての悩みとしては大きく3つの内容に整理できた。一つは、「子育てから解放されない」「自分の時間が持ちにくい」という『保護者自身の生活スタイル』に関するものである。二つ目は、「育てにくさ」や「遊び場のないこと」など『子どもに関わる際の課題』である。三つ目は「話し相手のなさ」「保護者自身に対する支援のなさ」などの『孤立感や孤独感』に関するものである。

これらのことをふまえて支援を考えると、まず、保護者一人ひとりのライフスタイルの尊重した支援の方策を考えていかななくてはならないことである。育児や障害に関する知識や方法の提供だけではなく、レスパイトや障害児保育など保護者自身に時間的なゆとりができるようなサービスの拡充も必要である。育児サークル等を紹介するなど、地域で気軽に話し合える場を設定することも必要になってくる。

また、就労の有無や同居家族の有無によっても悩みの内容が異なり、「障害のある子どもの保護者」としてひとくくりにできない状況が明らかになった。したがって、保護者のライフスタイルに関する情報収集が重要であり、さらには、保護者が生活している地域が都市部なのか郡部なのかによっても状況がちがうことを押さえた保護者支援の方策を考えていくことが重要だと考える。

最後に、調査結果では、もっとも頼りになる相談相手に「先生」や「専門家」をあげた回答は少なかったことを考えると、「先生」「専門家」が保護者の信頼を得るため、我々はより一層の努力が

必要である。

<文献>

- ・ 諏訪きぬ・戸田有一・堀内かおる「母親の育児ストレスと保育サポート」川島書店，1998.
- ・ 中村敬「地域における子育て支援ネットワーク構築に関する研究」厚生科学研究（子ども家庭総合研究事業）平成13年度研究報告書，2002.
- ・ 藤本文朗・黒田学「障害児と家族のノーマライゼーション」群青社，1999.

